

第27回

第3章 現代を生きる人間の倫理

公共性をもとめて

今回学ぶこと

多様な価値観や考え方をもつ人びとと共に生きていくためには、どのような態度・あり方が求められるのか、西洋思想の反省をふまえて思索した20世紀の哲学者の思想にもとづいて、現代社会における公共性について考える。特に、フランクフルト学派の諸思想を通じて、近代理性の問題点や理性のあり方について考え、アーレントの説く公共的空間の意義について理解を深める。また、ウィトゲンシュタインの思想から、言語の役割について多面的に考える。



講師

小林和久

■■ フランクフルト学派 ～ファシズムへの反省～ ■■

フランクフルト学派とは、1930年代にドイツのフランクフルトの社会研究所に集まって、近代的な理性の問題を中心に人間や社会について研究した学者たちのことである。

その代表者であるホルクハイマーとアドルノは、ナチスによるユダヤ人迫害の影響で、ドイツを追われアメリカに亡命する。そして、なぜ人間を自由にするはずだった近代という時代が、ナチスのような野蛮な行為を生み出したのか考察を深める。彼らは、近代の理性の特徴は道具的理性であると考え、そして、その理性を用いて、物だけでなく人間をも支配、操作しようとして、新たな差別や抑圧を生み、結果的に野蛮に帰ってしまうことになるという。ナチスの暴力的な行為はそのあらわれだと説いた。それに対して、同じフランクフルト学派のハーバーマスは、理性にはコミュニケーションによって合意を得ようとする面もあり、理性を重んじる近代はいまだ完成していないと説いた。

■■ アーレント ～公共的空間～ ■■

ドイツでユダヤ系の家に生まれたアーレントは、互いに異なる人びとが、公の場で関係しあうことを「活動」とよんで、人間の条件であると説く。そして、公共性とは、人びとが共通の問題に関心をもって、政治や社会のあり方を自由に議論することであると考える、それを「公共的空間」とよぶ。公共的空間を避けることは、お互いの違いから学びあうことを止め、自ら深く広く考えることも止めてしまうことになり、結果的に、全

体主義などの大きな力に身をまかせるだけになってしまうと考え、自由な議論にもとづく公共的空間の重要性を説いた。

■ ■ ウィトゲンシュタイン ～言語ゲーム～ ■ ■

20世紀には、言語の使用について考えることから、従来の哲学の問題を解決しようとする分析哲学という思想も活発になった。その代表者ウィトゲンシュタインは、言語はこの世界にある事実や現実のものを、鏡のように写す「像」であると考えた。すると、自然科学などの学問の問題は真偽を確認できるものであり、考えることに意味はあるが、神や善悪などこれまでの哲学が問題にしてきたことは、言語に対応する実体がこの世に無いため、考えても意味はないとし、「語り得ないことについては、沈黙しなければならない」と説いた。しかし、彼自身、後にこの考え方を改め、言語とは、私たちの日常生活の中での使われ方によって意味が決まっていくものであると考えて、「言語ゲーム」という考え方を主張した。私たちは他者との生活の中で、言語使用の規則をさまざまに試行錯誤し合っているのであり、そのあり方をゲームとよんだのである。



◆ コラム ◆

ウィトゲンシュタインは独創的な思想で後の哲学に大きな影響を与えますし、その生涯についてもさまざまな伝記が書かれたり、映画も製作されたりしています。

彼は富豪の家に生まれますが、4人の兄のうち3人は若いうちに自殺、もう1人の兄は戦争で片腕を失い「片腕のピアニスト」として有名になります。ウィトゲンシュタイン自身も若いうちから自殺の誘惑に苦しんだそうですが、彼にとっては哲学することが自殺の予防になったようです。

もともと彼は工学が専門でしたが、数学・論理学の研究に進み、哲学者・数学者として有名なラッセルの弟子になります。ウィトゲンシュタインは、初対面のときからあいさつもせずいきなり議論をしてくるような青年だったそうで、彼のマナーの無さや頑固さにラッセル先生も困ることはあったようですが、彼の才能や純粋さを高く評価して、哲学を探究することをすすめます。

ラッセルは核兵器廃絶運動にも積極的にかかわり、「ラッセル＝アインシュタイン宣言」という反核宣言を発表した人でもあります。偉大な師ラッセルとの出会いがなかったら、ウィトゲンシュタインの人生はどうなっていたのでしょうか。